

平成25年(ワ)第38号等「生業を返せ、地域を返せ！」福島原発事故原状回復等請求事件等

原告 中島 孝 外

被告 国、東京電力株式会社

意見陳述書

2015（平成27）年5月19日

福島地方裁判所第1民事部 御中

氏名： 佐久間 康恵 

(原告番号 T-1257)

1, 原発事故前の生活

私は、福島県二本松市旧東和町の代々農業を営む家に生まれました。地元の短大を出て地元就職し、国見町生まれの夫と結婚し、結婚後の短期間を除いて、ずっと福島で暮らしてきました。2011年3月11日当時、長女は小学6年生、長男は小学1年生で、それぞれ進学・進級するのを心待ちにしていました。

2, 一時避難

(1) 2011年3月12日昼、親戚から原発が危ないらしいと聞きました。最初は漠然と怖いと思っただけでしたが、放射能に関する知識を持っていた兄から、マスクをしろ、なるべく外に出るな、などアドバイスを受けて、ようやく事の重大性に気付きました。

(2) 原発の状況が刻々と悪化していく様子が報道され、どんどん不安が募る中、長女が熱を出して健康への影響が心配になったので、両親と妹一家とともに、滋賀県の親戚宅へ身を寄せることにしました。単身赴任中の夫に相談すると、「これからどうなるか分からない。原発が落ち着くまで行っていいよ。」と後押ししてくれました。

3月19日、ほとんど眠れないまま、まだ外が暗いうちに家を発ちました。友達にも告げることができず、人に知られないようにと、まるで夜逃げをするような気持ちでした。私たちだけ避難することに後ろめたさを感じていたからです。

(3) 私たちは、4月1日まで滋賀県の親戚宅で一時避難生活を送りました。当初は、何よりも、放射能の恐怖から逃れることができ、ほっとしました。

しかし、それもつかの間で、この先どうすべきか悩み始めました。親戚は、「ここから学校に通ったら。」と言ってくれました。ありがたいと思ったものの、私にも子どもたちにもその勇気はありませんでした。福島出身ということで差別されるのではないかと思ったからです

(4) 3月末、長女の通う小学校から、卒業式と卒業写真の撮影を行うが、誰か一人でも欠席すれば卒業文集に載せるクラス写真を撮影することができないと連絡がありました。

夫に相談すると、「まだ状況は全然よくなってないよ。今帰ってきたら、避難した意味がないんじゃないの。」と言われました。

しかし、避難したことの後ろめたさから、長女のクラスメイトに迷惑をかけてしまうわけにはいかないという考えが先行し、迷った末、二本松へ戻ることを決断しました。

(5) 戻ってきた後も、子どもたちの健康を考えると、再度避難するべきではないか悩みました。しかし、当時、インターネット上で、福島ナンバーの車が傷つけられたり、避難先の学校で子どもがいじめにあったりという情報が飛

び交っていました。また、子どもたちも「友達と離れたくない。」「友達を置いて、自分だけ助かりたくない。」との意見で、私自身も近くに住む妹一家、父母や祖父母を残して避難することは決断できませんでした。

3. 生活の変化

- (1) 自宅に戻ってからは、窓を開けず、洗濯物は室内に干し、食品の産地にも気を付けるなど、放射能から身を守るためのあらゆる対策を今も続けています。
- (2) 一番残念なのは、両親が作った作物を食べられないことです。両親は生きがいである農作業を2年前から少しずつ再開しましたが、線量の高い東和で農業をするのが心配で、会津に畑を借りて、週末通っています。母は、私が食品に気を付けていることを知りながらも、時折、収穫した野菜を、「〇〇ベクレルだったから、食べる？」と、気を遣いながらすすめます。私自身、子どもの頃から田畑に行くのが好きで、よく農作業を手伝っていましたから、自分が丹精込めて作ったものを食べて欲しいという気持ちはよくわかります。それだけに、子どもの健康の為とはいえ、母に「ごめんね」と断るたびに、申し訳ない気持ちになります。

できる限り化学肥料を使わずこだわって作った実家の米や野菜は、事故前は、一番おいしく安全なものでした。しかし、事故後、代わりに買って食べる他県の野菜からは、当然のように味わっていた実家の野菜のような「おいしさ」を感じることはできません。

- (3) 子どもたちも、大きなストレスを抱えていると思います。被ばくをさせないよう、屋外だけでなく屋内でもマスクを付けさせ、屋外活動をできるだけ避けさせなければならなかったからです。

旧東和町では陸上競技が盛んで、小、中学校全校生が町をあげて取り組む「東和ロードレース」に参加しますが、線量の高い林沿いのコースを通ることになるため、長男には、事故後、一度も出場させていません。大会の翌日、息子の友達がみな、出場者に配布されたTシャツを着ているのを見て、長男

も、疎外感を感じたことでしょう。楽しいはずの学校生活がそんな思い出ばかりで不憫に思います。

4、最後に

私は、子どもを守りたい一心で、できる限り被ばくを避けるため気を遣い続ける日々を送っています。しかし、そのために、両親の作った作物を食べられず、悲しい顔をさせてしまったり、それまで仲の良かった友人と放射能についての考え方の違いで疎遠になったりと、失ったものは計り知れません。

そして、できる限りのことはしていても、子どもたちが、将来、病気にならないか、福島出身ということで肩身の狭い思いをしないか、結婚できるか、子どもを産めるか—いつも不安です。

事故前のように、みんなで花見をしたり、子どもたちと実家の田畑の手伝いをしたり、雨に濡れたり、海で泳いだり、山に山菜やクワガタをとりにいたり、実家の庭の柿やサクランボを取って食べたり、雪遊びをしたり…自然とたわむれる普通の暮らしが出来たらどんなにいいでしょう。

しかし、現在進行形で放射性物質に汚染されている以上、そのような暮らしをすることはできません。今も、除染で出た放射性廃棄物を燃やす仮設焼却施設を、この東和の夏無沼自然公園に作ろうと強引に計画され、除染してもどこまでも追ってくる放射性物質に生活が脅かされています。

事故前の普通の暮らしに戻れず、活動が制限され、同じことをただただ繰り返しているだけの生活が、私にとっては時間が止まってしまったかのようです。そんな中でも子どもたちにとってはかけがえのない成長の一日一日が過ぎていってしまう。他の地域に住む子どもが普通にしていることをさせることができないまま、過ぎてしまった時間は取り戻すことができません。

子どもたちを地元に残らせてしまった親として、責任を果たしたい。そのために、国と東京電力の責任を、しっかり追及したいと思います。

以上